

刊行に当たって

本書は、大平正芳氏没後十周年を記念して英文版『Postwar Politician : The life of Masayoshi Ohira』を出版するため、そのテキストとして、大平氏の没後二年目の昭和五十七年に出版された『大平正芳回想録』の「伝記編」を全面的に改訂したものである。私は外国語圏の出版について必ずしも明るくはないが、現代日本の政治家の本格的な伝記が外国語で刊行されたことは、吉田茂氏の場合を除いてほとんどなかったと思う。

今日、日本の世界における影響力や役割が大きくなり、日本の政治も、かつてとは比べものにならぬほど、国際社会の関心を集めるようになった。しかし、外国人の日本政治に対する理解はまだまだ十分とは言えず、多くの誤解や偏見が見られ、これが日本と諸外国間のさまざまな摩擦を増幅していることを否定できない。

政治は生きた現実を生きた人間が扱うものである。したがって、政治に携わる人間が政治に懸ける思いを實現しようとする過程を知らなければ、真に政治を理解することはむずかしい。

この意味において、このたび、英文による伝記が刊行され、大平という政治家の姿を通じて、日本の政治が理解される機会を得たことは、まことに喜ばしい。

本版への改訂に当たっては、きわめて多くの方々のご協力を得た。いちいちお名前を挙げないが、ただお一人だけ特に謝辞を捧げたいのは、これまでつねに日本の正しい紹介に尽力してこられたエドウィン・オ・ライシャワー教授に對してである。教授は八年前の『大平正芳回想録』刊行の時にも、「追想編」に玉稿を賜ったが、今回も、お忙しいなか多大の時間を割いて原稿の全文に目を通され、透徹した序文をお寄せいただいた。深く感謝申し上げる次第である。

私は故大平総理の年来の友人として、そしてまた、昭和五十四年十一月九日より昭和五十五年六月十二日、大平総理が死去されるまでの短期間ではあったが、内閣官房長官として故大平総理に仕え、その劇的な死にも枕頭で立会ったのである。

短い期間であったが、イラン政府による米国大使館の占拠、ソ連軍によるアフガニスタンへの侵略、モスクワオリンピックのボイコット等、世界中が注視するような大事件が頻発した時代であった。

故大平総理は、西側の一員という立場を明瞭にして、常に西側のリーダーである米国を助け、米国に協力するという態度を堅持したのである。

故大平総理逝きて十年、歳月は正に矢のごとく流れ去った。そしていま、大平総理が常に関心をもっていた国際問題も、日本の国内政治も、戦後最大の転換点に差しかかっている。このとき、その死まで理想を追い求めた政治家、大平正芳の真の姿を世界の人々に知ってもらえるようになったことに、私は格別の感慨を覚えている。

平成二年五月

伊東正義